

責任感の分散（傍観者効果）

大森拓哉ゼミ 3年

21211019 池田 周平

21211050 遠藤 雅英

21211187 鈴木 陽太

責任感の分散とは何か

・自分の他に傍観者がいるだけで援助する責任は分散するし、援助をしなかった場合でも、それに対する非難を分散する事が出来る。

さらには傍観者が何人かいれば、すでに誰かが助けに入ってくれるだろうから自分が出て行くことはないと思って、責任を回避する。ということである。

ニューヨークの殺人事件での出来事参照。

実験 1. 役職に立候補したかによるアンケート（24名）

Q 1. 委員長や会長などに立候補したことはあるか？

Q 2. (いいえと答えた人へ) なぜ立候補しなかった？

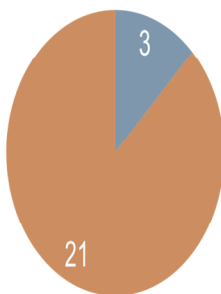
Q 3. 役目を果たすにはなにが必要か？

責任感 行動力 決断力 その他

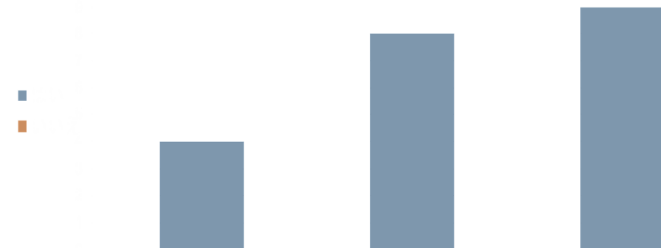
仮説：立候補するために責任感を重視する傾向がある。

集計結果

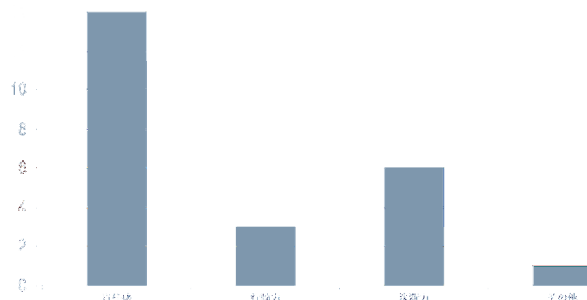
Q 1



Q 2



Q 3



考察：自身に責任感を持つことなく他人に任せてしまう傾向にある。

実験2. パターンの違う状況下での立候補に関するアンケート（25名）

Q. あるプレゼンの発表に向けて、発表者を一人決定したい。あなたはそれに立候補するか（25名）

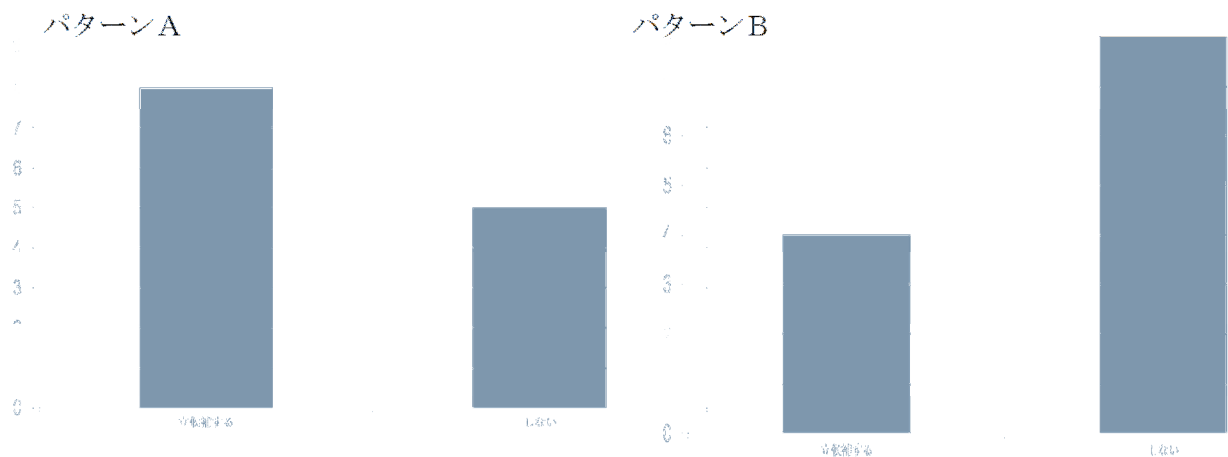
パターンA：4人でのプレゼン（13名）

パターンB：20人でのプレゼン（12名）

AとBとでは別の人が回答する

仮説：少人数では立候補する人が多く、大人数だとその数は少なくなる。

集計結果



考察

少人数のパターンよりも大人数のパターンのほうが責任感の分散が発生しやすい環境にあった。

大人数での会議だと想定して無意識的に率先して行動しないことを選んだ可能性がある。

まとめ

また、人数が多ければ多いほど責任感の分散（傍観者効果）は発生しやすいが、自身を傍観者とさせることなく、話し合いや気付きによって責任感の分散を回避することができる。

大多数の人がいる環境では、無意識的に「率先して動く」ことをしない傾向にあるが、それは自己犠牲を嫌う傾向であること、他者の犠牲に頼る傾向にあることといえる。

自身に責任感があるという自覚と決断力、そして環境や信頼関係などの要素が、責任感の分散を発生させないようにする。